

名勝無鄰庵庭園における本質的価値としての 野花を生かした芝生管理のあり方

Garden Fostering of the Lawn that Investigates Fundamental Sensitivity of Wildflower Utilization at Murin-an Garden a National Place of Scenic Beauty

阪上富男* 加藤友規* 半田沙奈絵*

Tomio SAKAUE* Tomoki KATO* Sanae HANDA*

1. はじめに

「名勝無鄰庵庭園」（以下、「無鄰菴」とする）¹⁾は施主・山縣有朋の構想の下、七代目小川治兵衛によって明治27年（1894）から29年（1896）にかけて作庭された。東山を望む風光明媚な別荘群の先駆けとして、また自然主義的な近代庭園の嚆矢として知られる、国指定の名勝庭園である。

本名勝庭園の本質的価値を顕在化させるためには、無鄰菴が無鄰菴たる所以を探究すること、つまり歴史的背景を踏まえ、施主である山縣有朋の作庭当時の構想を尊重し、その感性を読み取り、現代との感覚の違いを見極め、現在に相応しい庭園管理のあり方を探究したうえでの育成管理が必要となる。

平成27年3月発行の技術報告集²⁾（以下、前回報告集）においては諸資料から山縣の作庭意図を調査し、それを尊重しながら行っている庭園の維持管理を報告した。本稿ではその際に紹介した「野花を生かした芝生管理のあり方」について、その詳細を報告する。

2. 無鄰菴における管理制度と管理手法

（1）管理発注制度の変遷

公共の庭園や公園の維持管理においては、作業期間や経費などの様々な制約のために、伸びた枝を切り戻すだけといった単純な作業に終始せざるを得ないケースがしばしば見受けられる。無鄰菴の庭園管理業務に関しても、年度ごとに指名競争入札が行われていたために、落札業者は仕様書に適合することを基準として作業を行い、結果として現状追認型の管理となる傾向が見られた。

その状況を打開すべく、京都市では平成19年度からプロポーザル入札制度を導入した。これは管理を希望する団体に管理提案書を提出させ、庭園にとってよりふさわしいと考えられる提案を行った団体に管理を委託する制度である。また平成28年度からは指定管理者制度を導入した。これは無鄰菴の更なる活用のため、施設公開と庭園管理の両業務を一括して委託するものである³⁾。

（2）山縣の感性を読み取った庭園の管理手法

平成19年度のプロポーザル入札制度導入を境に、無

*植彌加藤造園株式会社

鄰菴における管理は仕様書に基づいた作業から、庭園の歴史的・文化的背景を踏まえた管理作業へと大きく変化した。前回報告集では「山縣有朋の感性を読み取った庭園管理のあり方」と題し、新たに取り組んできた方針の全体像を報告した。その要点は大きく分けて以下の3つである。

1) 修復剪定による主山⁴⁾である東山の顕在化

プロポーザル入札制度の導入以前に施されてきた現状追認型の単純な管理により生長した外縁の樹木が、庭園の構成上の主山である東山を見えにくくしていたため、修復剪定によって顕在化させる。

2) 野花を生かした芝生管理のあり方

一般に日本庭園の維持管理では、自然に生えた草本は雑草とみなされ抜き取られる。しかし無鄰菴における育成管理では、施主・山縣有朋の想いを受け継ぎ、野花を生かした芝生の管理を試みる。

3) 山縣の感性を踏まえたコケの管理

作庭当初コケを好まず芝を貼った山縣であったが、湿度の高い環境によって芝はコケへと遷移した。その自然が織りなす遷移を懐深く受け入れ趣を見出した山縣の感性と庭園観を踏まえたコケの育成管理を行う⁵⁾。

これら3つの管理方針は、作庭時における山縣有朋の構想を尊重し、その感性を読み取り、それを維持管理に活用すべく定めたものであり、無鄰菴の本質的価値を顕現させるための取り組みである。中でも2)の「野花を生かした芝生管理のあり方」については、平成27年度から本格的な調査研究と管理手法の検討を行い、それに基づく管理作業を開始した。

3. 芝生管理のあり方

（1）文献・古写真に見られる無鄰菴の芝生

山縣は、京都の庭園には「豪壯だとか、雄大だとかいふ趣致が少しもない」ため、それらを備えた「己流儀の庭園を作る」⁶⁾というコンセプトの下、無鄰菴を作庭した。この雄大さにつながる開放的な空間を構成するのが芝生であり、無鄰菴の大きな特色の一つとされている。無鄰菴に関する古文献のうち、特に芝生管理上参考とな

*UEYA KATO LANDSCAPE Co.,LTD



写真-1 『京華林泉帖』に掲載された無鄰菴の古写真

ったのが、明治42年(1909)に発行された『京華林泉帖』⁷⁾である。無鄰菴を「自然的の天趣を尚ふ」「野趣」⁸⁾を發揮した新庭園であると評価する同書には「池邊軒前小阜高低伏芝氈の如く奇石野花其間に點綴す」⁹⁾との記載があり、小丘に芝生が広がりその間に「奇石」と「野花」が点在する情景が記されている。そして同書掲載の古写真(写真-1)には、記述通り「氈の如く」柔らかに伸びた芝生の所々に野花が咲く、野原のような空間が写し出されている。

(2) 野趣あふれる芝生の管理

以上の資料調査をもとに「野趣あふれる芝生空間」を目指し管理を行うことにした。しかし、均一に短く刈り揃えられた芝生が「管理された芝生」であるとの認識が一般的である今日、多数の来園者を迎える公共庭園である無鄰菴において、単純に芝生の草丈を長くしただけの管理では「管理されていない芝生」だと見なされる可能性が考えられる。

そこで古写真に見られる野趣を感じる仕上がり、現代の人々が見ても気持ちのいい美しさ、その双方を両立した芝生空間を生み出すべく、管理手法を検討した。具体的な管理手法としては、まず定期的・画一的な芝刈りを廃止した。芝刈りは5月から11月まで月2回ほど行うが、実施時期は芝の長さや野草の生長具合を見計らって決定した。次に芝丈の長短を場所ごとに調整した。母

屋近くや園路沿いなど、来園者の動線に近い部分の芝生は短めに刈り揃え、奥に向かって草丈を長くする(写真-2)。また、景石や低木周りの草丈を短くそれぞれが際立つように刈り揃え、その間の芝生は自然な仕上がりとし、部分的に風に揺れる野草や、彩りを加える野草を刈らずに残した。一方、芝生の丘の天端は稜線をはっきり出すように刈り揃え、母屋から眺めた際に整った心地よい印象を与えることができるよう腐心した(写真-3)。

(3) 野花を生かした芝生管理

無鄰菴園内にある石碑「御賜稚松乃記」¹⁰⁾(写真-4)には、山縣自身の無鄰菴に対する想いが記されている。碑文の中から特に注目したのは「苔の青みたる中に名も知らぬ草の花の咲出たるもめずらし」という一文である。この文章から山縣が「名も知らぬような草の花」が苔の中に咲いている様子を、園内に見られる景物の一つとして好意的に捉えていたものと読み取ることができる。

以上のような資料から山縣が好み、文献や古写真にも見られる「野花」を「野趣あふれる芝生空間」を生み出すための要素として育成管理することにした。野花に関する調査は、平成19年度以降継続的に行ってきたものの本格的な観察・調査・育成は平成27年4月から開始した。

1) 野花の実態調査

まず実態調査として、次のA・Bの作業を行った。



写真-2 奥から見た芝生 (2015年8月3日撮影)



写真-3 主屋側から見た芝生 (2016年5月7日撮影)



写真-4 庭園内の「御賜稚松乃記」と「拓本」

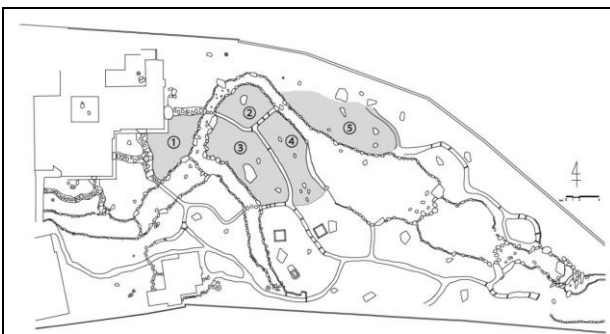


図-1 芝生区分図

A 定点写真

芝生を5箇所に分けし(図-1)、10箇所の撮影箇所を定め、週1・2回の定点撮影を行い、記録をとった。

B 「植物別情報まとめ」(図-2)

芝生内の植物の同定を行った。結果、平成27年度には約50種類の存在を確認し、35種類の植物を同定した。それらの草本ごとに情報をまとめ、「植物別情報まとめ」を作成した。「植物別情報まとめ」には、分類群・学名・分布・出芽期・花期・草丈・生活史・繁殖生態・繁殖力・花の特徴・在来か外来か、アレロパシーを発するか、手引除草の困難さ、無鄰菴での生育位置、来園者の反応などを記載した。

2) 各植物の管理方針・定義の作成

植物ごとの情報をまとめた上記の資料をもとに、どの植物を育成し、どの植物を除草するか、その方針を「手入れ方法に関する一覧表」としてリスト化することにした(表-1)。その際、手入れの判断基準として、以下の「○」・「△」・「×」に各植物を振り分けた。

「○」: 観賞して且つ種を落とすもの

「△」: 観賞はするが個体数を増やさず制限するもの

「×」: 見つけ次第除草するもの

平成27年度の野花の調査は、各植物を上記の3項目

和名: タネツケバナ

無鄰菴での手入れ:

観賞する。
種を落としてから除去する。

観賞・除去理由:

無鄰菴で最初に春を告げ、
田面を思わせる花。
存在箇所が限られるため
管理がしやすい。

分類群: アブラナ科タネツケバナ属

漢字名: 種漬花

学名: *Cardamine scutata*

分布: 全国

出芽期: 9~5月

花期: 3~5月

草丈: 足首~膝

生活史: 一年生(冬生)

繁殖生態: 種子(自動、付着)

繁殖力: 普通

花の特徴: 白色の4弁花。花弁は長さ3~4mm、
萼片は4枚、雄ずいは6本。茎下部から
数本の茎を直立させる。枝先に総状花序をなす。

2015年4月17日 流れの中

手引き除草: 容易。水辺の土壌が柔らかい地に生息し、
茎と根が切れずに抜けるため。

無鄰菴での位置: 芝地④、流れ、州浜。

お客様の反応: 不明

在来・外来: 在来

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
開花	種	枯	出芽								出芽・開花

注: 本文中の「無鄰菴での手入れ」、「繁殖力」、「手引き除草」、「お客様の反応」の項目の記載内容は現場での調査に依る。
表の黄緑は出芽期、緑は出芽も開花もしていないが存在している期間、
オレンジは花期、茶色は枯れている期間を表し、
データは無鄰菴での実地調査の結果に基づく。10月から3月は未調査。

図-2 「植物別情報まとめ」(タネツケバナ)

表-1 「手入れ方法に関する一覧表」

植物名	科・属 学名	手入れ方法	手引除草 困難さ	越冬時 手引除草	除去方法	繁殖力
1 タネツケバナ 一年生(冬生)	アブラナ科タネツケバナ属 <i>Cardamine scutata</i>	○	○	—	手引き	△
2 スズメノヤリ 多年生(冬生)	イグサ科スズメノヤリ属 <i>Luzula capitata</i>	△	△	—	刈払	△
3 スズメノカタビラ 一年生(冬生)	イネ科イチゴツナギ属 <i>Poa annua</i>	△	△	施す	手引き・刈払	○
4 スギナ 多年生(夏生)	トクサ科トクサ属 <i>Equisetum arvense</i>	×・△	×	—	手引き・刈払	○
5 ヒメスミレ 多年生	スミレ科スミレ属 <i>Viola inconspicua</i>	○	×	—	手引き・刈払	△
6 マツバウンラン 一年生(冬生)	オオハコ科マツバウンラン属 <i>Nuttallanthus canadensis</i>	○	○	—	手引き・刈払	○
7 オランダミミナグサ 一年生(冬生)	ナデシコ科ミミナグサ属 <i>Cerastium glomeratum</i>	×	△	施す	手引き・刈払	◎
8 タチヌメフグリ 一年生(冬生)	オオハコ科クワガタソウ属 <i>Veronica arvensis</i>	×	△	施す	手引き・刈払	◎
9 ツメクサ 一年生(冬生)	ナデシコ科ツメクサ属 <i>Sagina japonica</i>	△	○	—	手引き	○
10 カンサイタンポポ 多年生(冬生)	キク科タンポポ属 <i>Taraxacum japonicum</i>	○	×	—	—	×
11 ノンバ 多年生(夏生)	イネ科シバ属 <i>Zoysia japonica</i> Steud.	○	×	—	刈払・エッジ切り	△
12 ノミノフスマ 一年生(冬生)	ナデシコ科ハコベ属 <i>Stellaria uliginosa</i>	×	△	—	手引き・刈払	◎
13 スミレ 多年生	スミレ科スミレ属 <i>Viola mandshurica</i>	○	×	—	手引き・刈払	△
14 ハナニガナ 多年生	キク科ニガナ属 <i>Iberidium dentatum</i>	△	×	—	手引き・刈払	○
15 カタバミ 多年生	カタバミ科カタバミ属 <i>Oxalis corniculata</i>	×	×	(施す)	手引き	○
16 ナガバグサ(カンクキーブルーグラス) 多年生(冬生)	イネ科イチゴツナギ属 <i>Poa pratensis</i>	×	?	施す	手引き・刈払	○
17 チヂロチヂロ 多年生	キク科チヂロ属 <i>Euchiton japonicus</i>	△	△	—	手引き・刈払	△
18 オニタビラコ 一年生(冬生)	キク科オニタビラコ属 <i>Youngia japonica</i>	△	?	—	刈払	×
19 ヒナギキョウ 多年生	キキョウ科ヒナギキョウ属 <i>Wahlenbergia marginata</i>	△	△	—	手引き・刈払	○
20 イモカタバミ 多年生	カタバミ科カタバミ属 <i>Oxalis articulata</i>	△	△	—	手引き	△
21 カラスビシャク 多年生(夏生)	サトイモ科ハンナ属 <i>Pinellia ternata</i>	○	?	—	—	×
22 ウラジロチヂロ 一年生(冬生)、多年生	キク科チヂロ属 <i>Gamochaeta coarctata</i>	×	△	施す	手引き・刈払	○
23 トキワハゼ 一年生(夏生、冬生)	ゴマノハグサ科サギゴケ属 <i>Mazus pumilus</i>	△	△	—	手引き	?
24 アゼナルコ 多年生	カヤツリグサ科アゼナルコ属 <i>Carex dimorpholepis</i>	△	?	—	刈取り	×
25 ヒメコヌカグサ 多年生	イネ科ヌカカボ(コヌカグサ)属 <i>Agrostis valvata</i>	○	△	—	刈払	○
26 チガヤ 多年生(夏生)	イネ科チガヤ属 <i>Imperata cylindrica</i>	△	×	—	刈払	○
27 ドクダミ 多年生(夏生)	ドクダミ科ドクダミ属 <i>Houttuynia cordata</i>	△	×	—	手引き・刈払	△
28 チドメグサ 多年生	ウコギ科チドメグサ属 <i>Hydrocotyle sibthorpioides</i>	×	×	(施す)	手引き	◎
29 ネジバナ 多年生(冬生)	ラン科ネジバナ属 <i>Spiranthes sinensis</i>	○	×	—	刈取り	×
30 コニシキソウ 一年生(夏生)	トウダイグサ科コニシキソウ属 <i>Euphorbia maculata</i>	×	○	—	手引き・刈払	◎
31 オトギリソウ 多年生(夏生)	オトギリソウ科オトギリソウ属 <i>Hypericum erectum</i>	△	○	—	手引き	◎
32 ヒメクグ 多年生(夏生)	カヤツリグサ科カヤツリグサ属 <i>Cyperus brevifolius</i>	△	×	(施す)	手引き・刈払	△
33 メシバ 一年生(夏生)	イネ科メシバ属 <i>Digitaria ciliaris</i>	×	△	—	手引き・刈払	◎
34 ウリクサ 一年生(夏生)	アゼナ科アゼナ属 <i>Lindernia crustacea</i>	△	○	—	手引き	◎
35 スズビトハギ 多年生(夏生)	マメ科スズビトハギ属 <i>Hylodesmum podocarpum</i>	△	×	—	刈取り	△

に当てはめるための判断材料を探ることを目的として行っていったと言える。またすべての草本類のうち「○」・「△」にあたる「観賞する」ものを「野花」と定義し、「×」を「雑草」と定義した。また草本類全体を「野草」と呼称し「○」・「△」・「×」すべてを包括する概念と定義した。

3) 管理のための調査

手入れに関する一覧表を2種類作成した。

A 「手入れ方法に関する一覧表」

「手入れ方法に関する一覧表」では、「○」・「△」・「×」

の各「野草」の管理方針を記すとともに、除草の方法に際しても手引除草で根から引く、刈払い機で地表面だけ除去する、種が散布しないように慎重に切り取るなど、その植物ごとに適した方法を定め、一覧とした。

B 「出芽期・開花期・種付け時期に関する一覧表」

「出芽期・開花期・種付け時期に関する一覧表」(表-2)は、35種類それぞれの野草がどの時期に、どのような状態になっているのかを示した一覧表である。これは芝生と野草管理の作業時期、工程計画の設定に活用する。なお「出芽期」・「開花期」・「種付け時期」は、次のように定義した。

「出芽期」：出芽または萌芽が見られる時期

「開花期」：花が咲く時期

「種付け時期」：種を付けてから落とすまでの時期

4) 調査・管理のプロセスと課題

実際の野花の育成管理は、上記の調査・資料作成と並行して行っていたため、定義や区分を定める前に管理作業が先行する場合も多々あった。そのため管理結果を踏まえ定義付けや定義の変更を行った。文献情報をベースに実地調査・管理の結果を反映させた「手入れ方法に関する一覧表」の完成は、野草の生育が落ち着いた秋を待たなければならなかった。

調査・管理のフローの一例として、ノミノフスマの事例を紹介する。芝生番号①に分布する同植物は、生育箇所が直径40cmほどの1箇所のみであったため、除草は容易であると判断し、他の植物とともに観察を続けた。その後芝生には「4月下旬の芝生の様子」(図-3)に見られるように多種の「野草」が開花した。観賞対象である開花中の「野花」の保護と観察のため、芝生内への立入りを禁止し、除草作業も中断した。すると繁殖力の強いノミノフスマは繁茂を続け、そのまま種を落とし芝生内に茶色い塊となって枯れ残った。その後の芝刈りの際に同箇所を確認すると、繁茂していた部分の芝生が薄くなっていた。この観察によって、ノミノフスマの芝生への悪影響が実地で確認され、管理区分「×」の「雑草」として定義するに至った。

この事例からはある課題も浮かんできた。たとえ「○」・「△」・「×」の定義を作成し、それぞれの植物に当てはめたところで、芝生の状況によってはその調査情報を管理に活用することができない。「○」・「△」の「野花」を守ろうとすると「×」の「雑草」を除草できない状態に陥ることがあるのである。

5) 除草時期の検討—冬の除草

ノミノフスマを含め、草本類のなかには秋に発芽してその状態のまま越冬し、翌年に生長・開花するものがある。そのため、観賞すべき植物が生長・開花する前の冬の時期に、除草を行うというアイデアが生まれた。

まず12月に観察・管理を試みた。しかしこの頃の新芽はあまりにも小さく、種類の分別も新芽の摘み取りも困難を極めた。そのため新芽の生長する2月を待ち再度

表-2 「出芽期・開花期・種付け時期に関する一覧表」(部分)

植物名	科・属学名	4			5			6			7			8			9			
		1	10	20	1	10	20	1	10	20	1	10	20	1	10	20	1	10	20	
1 タネツケバナ 一年生(冬生)	アブラナ科タネツケバナ属 <i>Cardamine scutata</i>	開花			種	枯	出芽													
2 スズメノヤリ 多年生(冬生)	イグサ科スズメノヤリ属 <i>Luzula capitata</i>	開花				枯														未調査
3 スズメノカタビラ 一年生(冬生)	イネ科イチゴツナギ属 <i>Poa annua</i>	出芽・開花																		
4 スギナ 多年生(夏生)	トクサ科トクサ属 <i>Equisetum arvense</i>	出芽																		
5 ヒメスミレ 多年生	スミレ科スミレ属 <i>Viola inconspicua</i>	開花		種																出芽
6 マツバウンラン 一年生(冬生)	オオハコ科マツバウンラン属 <i>Nuttallanthus canadensis</i>	出芽・開花				種・枯														未調査
7 オランダミミナグサ 一年生(冬生)	ナデシコ科ミミナグサ属 <i>Cerastium glomeratum</i>	出芽	開花		種	枯														未調査
8 タチイヌノフグリ 一年生(冬生)	オオハコ科クワガタソウ属 <i>Veronica arvensis</i>					種	枯													
9 ツメクサ 一年生(冬生)	ナデシコ科ツメクサ属 <i>Sagina japonica</i>	出芽	開花			枯														出芽
10 カンサイタンポポ 多年生(冬生)	キク科タンポポ属 <i>Taraxacum japonicum</i>	出芽	開花		種		枯													未調査
11 ノシバ 多年生(夏生)	イネ科ノシバ属 <i>Zoysia japonica</i> Steud.	出芽	出芽・開花							出芽										
12 ノミノフスマ 一年生(冬生)	ナデシコ科ハコベ属 <i>Stellaria uliginosa</i>	出芽	開花			枯	未調査													
13 スミレ 多年生	スミレ科スミレ属 <i>Viola mandshurica</i>	出芽		開花		種				出芽										

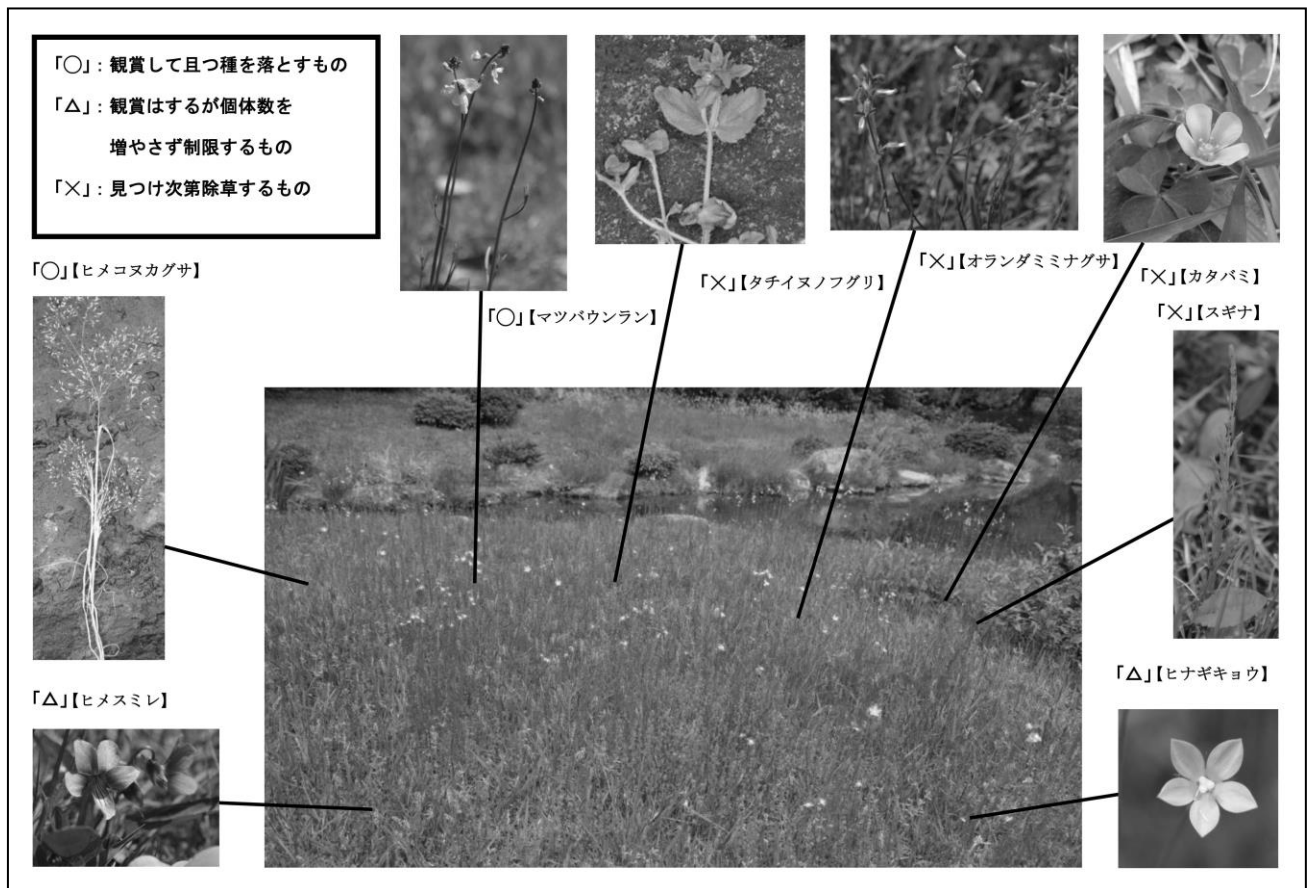


図-3 「4月下旬の芝生の様子」

観察を行うと、約1cmに伸長した新芽を確認することができた。その中からオランダミミナグサなど「雑草」として除草を要する植物については、可能な限りの除草を施した。このような冬の除草を施すことによって、平成28年春には「雑草」の個体数が格段に少なくなり「野花」の開花時期における除草の手間を大きく減らすことに成功した。「×」の「雑草」の繁殖を抑制し、「○」・「△」の「野花」を育成するための有効な方法であることが確

認された。

(4) 平成27年度野花調査・管理のまとめと今後の課題

1) 芝生の調査・管理の体制

平成27年度は本格的な調査・管理の初年度ということもあり、調査研究と管理が並行して行われる場面がしばしば見られた。手探りでの調査・管理は試行錯誤の繰り返しではあったが、担当者2名が調査・管理を一貫して行うことで、常に情報をフィードバックし管理に応用

できる有機的な体制を築くことができた。また「野趣あふれる芝生空間」を生み出すために定期的・画一的な芝生管理を廃止し、冬も含めた1年間のうちで、それぞれの植物に適した時期に、適した方法での管理を行う体制を築くことにより「野花」を生かした芝生空間を育成することが可能であることを証明した。

2) 「雑草」定義の再考

管理の上で気付かされたのは、「X」の「雑草」として定義し、すべて除去してきた植物のなかにも「野趣あふれる芝生空間」を生み出す上で効果的なものがあるということである。例えば繁殖力が強いチガヤにも野原の風情があり、スズメノヤリにも「懐かしい風情がある」との感想が関係者・来園者から聞かれた。適した時期に適した方法による管理を行うことで、繁殖力の強い「雑草」と定義したものについても個体数の制限が可能であることが判明すると、それら「雑草」も活用できるのではないかとの考えが浮かんできた。

3) 今年度の手入れ方針

以上のような考察を踏まえ、今年度は昨年調査課題であった観賞する「野花」と除草する「雑草」との区分および「○」・「△」・「X」の定義区分の全面的適応を一旦保留することにした。これは「雑草」と規定した「野草」であっても「野花」と同様にその季節の風情を醸し出す効果があること、また「雑草」によっては繁殖力が旺盛で、完全な除去は不可能であること、そして適した時期に適した方法で手入れを続けることによって、各植物の個体数が制限可能であるということが、一年を通しての調査・管理によって判明したためである。これにより「見つけ次第除草する」対象つまり「雑草」という区分は無効になったのである。それゆえ芝生に生育する「野草」をすべて「野花」として捉えることもできる。

平成28年度の「野花を生かした芝生管理」においては、昨年度の定義を十分参照しながらも盲目的に縛られず、一年間の実地調査の結果を踏まえて芝生の植物すべてに対して個体数を制限しながら観賞できるよう試みる。芝生における記録と観察・調査は継続して行い、調査内容の完成度をさらに高めていく。

4. おわりに

山縣作庭の他庭園では、花を意図的に植栽していた記録が認められるが¹¹⁾、無鄰菴において何らかの野草を植栽したという記録は見つかっていない。野花を生かした芝生管理では「名も知らぬ草の花の咲出たるもめずらし」という「御賜稚松乃記」の記述に基づき、自然に生えてくる野草を生かした育成管理を進めている。しかし『京華林泉帖』には植栽されたと見受けられることでもできそうな野草も見られるため、古写真を分析しどのような野花が咲いていたのか更なる調査を進めたい。

「野花を生かした芝生管理」は野趣を尊び、自然の遷移を懐深く受け入れた山縣有朋の感性や庭園観に端を発

する。古写真・文献などから読み取れる当時の景色を再現するだけでなく、山縣の庭園観を軸にして、明治から大正、昭和、平成へと自然に遷移した無鄰菴の姿を大切にしつつ、現代の感性などのエッセンスを折混ぜて、育成管理を行おうという試みの一つである。

野趣あふれる芝生空間の醸成のために、野花をどのように生かしていくのか。常に柔軟に管理方法を検討・更新し、無鄰菴にふさわしい景色を探求し続けることが大切である。時代を経て無鄰菴をとりまく環境や感性にも変化がみられるが、明治期の山縣有朋の無鄰菴を尊重し、山縣の構想や感性、想いを読み取りつつ、現代の無鄰菴にふさわしい景色を育むお手伝いをし、次世代へと継承していくことが役目だと考える。

参考文献・注釈

- 1) 本稿では、〔むりんあん〕の表記を以下のようにする。
①文化財名称としては、京都府教育委員会(2006):京都府文化財総合目録に基づいて〔名勝無鄰菴庭園〕とする。
②京都市の施設名称としては、京都市無鄰菴等条例に基づいて〔無鄰菴〕とする。
- 2) 阪上富男、加藤友規(2015):名勝無鄰菴庭園の年間維持管理—山縣有朋の感性を読み取った庭園管理のあり方—:日本造園学会学会誌ランドスケープ研究 Vol.76 増刊技術報告集
- 3) 植彌加藤造園株式会社は平成19年度以来、プロポーザル入札制度に基づき無鄰菴庭園の管理を継続的に受注してきた。(平成21年度を除く) また平成28年度からは指定管理者として施設の運営も行っている。
- 4) 黒田謙(1907):続江湖快心録:山田芸洲堂
同書中に山縣の言葉として「此庭園の主山といふは南、此前に青く聳へてある東山である」という一文がある。
- 5) 無鄰菴の地殻の変遷については、小杉忠広(2011):芝から苔への遷移が創る空間美—無隣菴での検証—:京都造形芸術大学大学院修士論文に詳述されている。
- 6) 前掲4)
- 7) 湯本文彦(1909):京華林泉帖:京都府庁
- 8) 『京華林泉帖』の前文に以下の記述がある。「京都林泉も稍々舊來の箱庭的の範鎔を脱して自然的の天趣を尚ふ傾向を生じたるが如し但し舊時に於ても勸修寺の水池園東本願寺の涉成園の如きは土地廣大にして樹林森藪池水滉渺自から野趣少からず京都林泉中に特色を備へたりしか近年に至り山縣公爵家の無隣菴は更に此趣旨を發揮せられたるものといふべく」
- 9) 前掲7)
- 10) 庭園内に建つ山縣有朋自撰の石碑「御賜稚松乃記」
拓本の出典は徳富猪一郎編(1933):公爵山縣有朋伝(下巻):山縣有朋公記念事業会
- 11) 椿山荘内の石碑「椿山荘記」に「珍弁佐石環遶四面」との記述があり、益田孝著・長井実編(1989):自叙益田孝翁伝:中央公論社、p281-282には、原富太郎が古稀菴の庭に花が植えてあることを批判したとの記述ある。

名称:名勝無鄰菴庭園

所在地:京都市左京区南禅寺草川町31番地

発注:京都市

育成管理:植彌加藤造園株式会社

規模:3,135 m² (約950坪)